

「横井小楠をめぐる幕末維新の英傑たち」

小野寺 満憲

江戸開府400年の江戸ブーム時に、幕末、明治初期に日本を訪れた数多くの外国人が、大変な文明の民・文明の国なのに驚いてこぞって日本・日本人を賞賛する観察記を残しており、明治維新は江戸の人的・文化的遺産があってこそその成功と述べているのを知った。そしてトインビー曰く、「近代国家日本は人類の歴史の奇跡の一つ」だと。そこで江戸教育が育てた明治維新の先覚者として、横井小楠・吉田松陰・佐久間象山の三人を選んだ中で、小楠のことを次のように紹介した。

横井少楠（1809～69）

一富国・強兵・**士道**の三位一体を主張
「英国は富強を事とし、インド物産の富、万国に冠絶するをもって、世界中の宝蔵と称するに、英国ひとりその利をほしいままに」しており「日本と英国とは国勢相似たれば、強兵を務るも英に則り」と指摘し、英国海軍に匹敵する日本海軍の必要性を力説した。「西洋の学はただ事業上の学にて、心徳上の学にあらず、心徳の学無きがゆえに人情にわたることを知らず、交易談判も事実約束を詰めるまでにて、詰まるところ遂に戦争となる。戦争となりても事実を詰めてまた償金和好となる。人情を知らば戦争も停むべき道あるべし。事実の学にて心徳の学なくしては、西洋列強戦争の止むべき日なし」

圧倒的な軍事力を持つ列強の植民地化の最終段階に当たり、アヘン戦争による“眠れる獅子”清国の惨状を身近に見ながら、今日のような自虐史観とは大違いな気概を持った堂々たる言い分、特に「士道」「心徳」「事実の学」という言葉が宿題として残った。次のような揶揄された幕末政局のイメージを持っていたのでなおさらである。

「泰平の眠りをさます上喜撰

たった四杯で夜も眠れず」

「アメリカが 来ても日本 つつがない」

今、NHK大河ドラマ「龍馬伝」が、龍馬役の福山雅治の好演もあり人気が高い。そこでの横井小楠の出番は、神戸操練所建設の資金支援を求める勝海舟の使者として越前藩主春嶽に謁見した際、そばに控えていた五十代半ばの男としての場面だけのようである。

龍馬：「死に金は、ものと引き換えに払うだけの金です。けんど、生き金ゆうがは、使うた以上のもんが何倍にも返ってくる金です」

春嶽：「生き金と死に金か・・・」

龍馬：「私は勝先生に教わりました。ものごとにはまったく違う見え方があると。攘夷も正しかつたが間違うちょたが、見方によってまるで違うがです」「今、土佐では大殿様のために働いた者が牢に入れられちゅう。どういてこんなことになるが、わしは納得できんがです」

春嶽：小楠に「なかなか面白いのお、こいつは」
小楠：「お前はデモクラシーという言葉ば知つとるか。やがて日本にもデモクラシーの時代がくるかもしれんとばい。時代の変われば、人の考えも、物の値打ちも当然変わるったい」

龍馬：「そのとおりにやと思います」

小楠：「では、土佐で起こつとることは当たり前のことではななか。今まで値打ちのあつたもんが、古びて用なしになつたっちいうだけのことたい」

世の中の流れから見れば、ひとり人間など芥子粒ほどのもの。そんな小楠の考えは、龍馬に衝撃を与えた。という構成である。司馬遼太郎は、物語としての自由度を持たせるために、「龍馬」ではなく「竜馬」を使ったという伝でいけば竜馬のセリフかもしれない。

この時、小楠の「国是三論」の海軍力強化策が念頭にあつた春嶽は五千両支援した。幕府支給の年三千両に比して大金である。この福井藩の財政的余裕は、小楠の指導を受けた三岡三郎（由利公正）が物産総会所をおこして、財政整

理や物産振興にあたった成果である。長崎蔵屋敷を開設してオランダとの生糸や醤油の交易特約で活躍した。1861（文久元）年末には内外への輸出物産額は300万両に上り、藩金庫には金50万両の正貨を貯蓄したという。この際、小楠・龍馬・公正は愉快地に飲み、語り、龍馬の声調頗る妙であった。と、由利は追想している。

「君が為捨つる命は惜しまねど

心にかかる国の行く末」（龍馬）

この時、龍馬と2度目の小楠は、「国是三論」や「国是七条」などの持論を縷々語り、挙藩上洛計画とその計画成功後の朝廷主導政府による日本国中共和一致の政治を語り龍馬の協力を依頼している。龍馬は姉乙女に「一大藩（福井藩）によくよく心中を見込て頼みにせられ（中略）龍馬二、三家の大名と約束を固くし、同志をつのり、朝廷より先ず神州をたもつの大本を立て、夫より江戸の同志と心を合せ、右申す所の姦吏を、一事に軍いたし打殺し、日本を今一度せんたくいたし申候事に致すべくとの神願にて候」と書き、福井藩に見込まれたことに自負心をみせ、幕府奸吏を一掃して日本を今一度大改革（洗濯）しなければならないと語っている。ここで小楠と由利の才能を認めた龍馬は、二人を新政府の参与に推薦している。幕末きっての政策通の小楠の薫陶を受けた由利は、策謀や駆け引きにたけても財政ともなれば、お手上げの大久保利通や木戸孝允のような政略家にはない才能に恵まれていた。新政府は、他ならぬ徳川親藩の福井松平家の由利に出馬を懇請せざるを得なかった。彼は、「御用金穀取扱」として政府会計基金の300万両を調達した。次いで本位貨幣の金貨や貿易銀貨などの品位を定め、太政官札の発行によって政府の財政基盤をつくったのだ。

このように、「龍馬の師匠・横井小楠をめぐる英傑たち」を綴る中で、宿題の言葉を理解し、「龍馬伝」を膨らませ、明治維新の全体像に知見を加え、小楠の現代的価値にも触れてみたい。

1. 横井小楠をめぐる幕末維新の群像



2000年3月、熊本市高橋公園に設置された前を見据える横井小楠を中心にした生誕190年記念群像である。左に世界を視野に地球儀を前に語り合う海舟と龍馬、右に小楠の実学の実学を見守る越前藩主・松平春嶽と身を乗り出すようにして小楠の話に聞入る熊本藩主・細川護久をイメージしたものである。

(1) 横井小楠

横井家は、桓武平氏北条氏嫡流得宗家に発する。先祖は「太平記」の中先代の乱に登場し、一時鎌倉を占領して足利尊氏の反撃にあつて、やむなく逃れた、あの北条時行である。

藩校・時習館で朱子学を学び、更に会沢正志斎の「新論」で尊王攘夷論を、熊沢蕃山の「集義和書」から堯舜の理想政治を実現する実学について学び、29歳で塾長をつとめ、31歳の江戸留学、43歳の21藩遊歴で視野と人脈を広げた。私塾「小楠堂」の評価高く他藩士達の入門も多かった。実学は、日常事物に心を用いて考え、道理を会得して、これを日常生活に生かすことと教え、功利主義をきらい、何事に対しても公平無私に、誠心誠意やることが大事と教え、政治は道徳でなければならないと断言した。敬愛する楠木正成や中江藤樹の無私の心でひたすら世のため国のために尽くす清冽な地下水のごとき伝統を掘り当て、幕末の国難の時期に噴き出させたのが小楠の功績であった。世界のどの民族にも共感を呼ぶ「理想」を語った。しかし、藩内では朋党の争いが激しく、小楠の実学の志を生かす藩風がなかった。

(2) 横井小楠と松平春嶽（慶永）

諸国遊歴の際、福井に賓客として滞在中、多くの藩士達が小楠の講義に感銘を受け、小楠の実学思想が福井藩を風靡した。有志からの学校制度のあり方の質問に対し、「学校問答書」で答えた。

「各藩は競って学校を創立したが章句・文字を学ぶだけの読書所に成り下がり、経世済民（世を治め、民の苦しみを救う）の理想に燃える人材を育てるような学校になっていない。したがって、学問と政事を一致させ、経世済民の志を持つ人材を育成するような学校を創立しなければならない。その基本は藩主が、一藩の手下となるような立派な人でなければならない」と語っている。

春嶽は優れた見識を持った小楠を敬い慕っていたが、小楠が福井藩士・村田氏寿に出した手紙を見て招聘の意を固めた。それには、

「西洋諸国は政教一致の政治が実現されており、外国に対抗するためには日本では堯舜三代の聖人の道を究めておかなければ西洋の邪教にとりつかれてしまう危険がある」とあった。招聘使者村田は、春嶽自筆の短冊

「愚かなるところにそそげひらけたる

君の誠を春雨にして」

を渡した。小楠は、もはや地元熊本では意見等を用いられことはなくなっていた。しかし堯舜孔子の道の実現の可能性を求めたいという強い思いは捨てきれずにいた。松平春嶽に理想の君主像を見い出していた小楠は、迷うことなく春嶽の意向に応じ、村田に内諾の旨を答えた。しかし、肥後藩の重役たちは「小楠は信頼できない人物である」「藩学に逆らい異説・実学により藩政を批判している」「それほど見識があるとは思えず、熊本藩においてさえ登用しない者であるから、不都合を生じて迷惑をかける」と大反対。慶永の妻は斉護の娘で、婿一舅の関係である。結局、慶永は斉護に二度も直接手紙を書き、斉護は「ここまで婿殿が思い込んでるのだ」と重役たちの反対を押し切って承諾さ

せた。

安政5(1858)年4月、小楠は福井に着き、越前藩の藩校での講義、および藩政改革の指導に当たることになった。その直前に京都で橋本佐内と話し合ったが悉く意見が符合した。江戸の春嶽の藩政方針や藩校明道館の運営方法などが、すべて小楠の考えていたことと一致していたので、大手を振って福井入りできた。

まず、明道館教育に注力し、求められた「朱学純粋の学者」として、水戸学を批判、根本の学問に引き戻した。現実感覚の乏しい水戸斉昭の攘夷論に見切りをつけていた。次に「民を富し、産を生ずるによって国を富し士を富す」人材づくりに注力。由利公正・長谷部甚平らと共に藩政改革（富国策）に本格的に乗り出し、藩営交易の拠点である物産総会所を設立。殖産興業政策と長崎・横浜における海外貿易をおこない、莫大な利益を上げて藩の財政建て直しに大きな成果を上げた。「横井先生は、口舌の徒ではない。その説かれる教えは高邁だが、さすが実学を旨とされるだけあって、藩を富ます術にも長けておいでだ」と、小楠の越前藩における名声は完全に確立された。

次に、藩政の基本政策について、藩首脳との討論を下に「国是三論」（富国・強兵・士道）を定めた。「まず越前藩の富国強兵を達成し、これを日本全国に広げ、さらに日本に仁義の大道をおこして、世界の世話焼きになり、一発で1万も2万も戦死するような戦争を止めさせて、世界第一等の仁義国家になる」という小楠の政治思想を具体的に集大成したものである。

また、安政の大獄における一橋派の春嶽の隠居・謹慎と佐内の刑死による藩内の混乱を鎮め、その政治的手腕の高さに春嶽を心服させた。

井伊直弼の横死によって返り咲いた春嶽は、公武合体に邁進して中央政界へ復帰すべく小楠の助言を要し上京を求めた。春嶽の心術の正不正がこの国の治不治に関係するので、春嶽に直接講習できるよい機会と喜び、学問上はもとより政治上の諮問にも精一杯こたえた。「堯舜

の道」に深い関心を示していた春嶽も小楠の信念に呼応。堯舜のような王道政治を目指すことを確認し合った。

文久2年(1862)、小楠の進言で春嶽が政事総裁職に就くと、春嶽のブレーンとして幕政に参加した。小楠は、慶喜・春嶽新政権の基本方針として、「国是七条」を建議した。その第一条は「將軍は上洛して列世（歴代）の無礼を天皇に謝罪すること」であった。幕府も朝廷も、私の心を捨てて、公の心を持って議論を尽くし、日本の進路を決定しなければならない。そのために、まず天皇から大政を委任された幕府の方から、歴代の無礼をお詫びし、私心なき事を天下に示そうというのである。さらに、大名の参勤交代を大幅に縮小し、人質として江戸に置かせていた妻子を故国に帰らせること。これも大名たちに幕府の私心なき事を示すためである。あとは人材登用、公論の尊重、海軍増強、貿易振興など、『国是三論』に共通するものであった。

慶永は早速、参勤交代の大幅縮小、大名の妻子帰国などを実現した。しかし「列世の無礼を天皇に謝罪すること」には、幕府首脳に反対意見が強かった。その中で慶喜が「小楠の意見を聞きたい」と言い出した。幕府首脳がずらりと並んだ中で、小楠は慶喜に語った。

『幕府が公武一和を標榜する以上、武家の頂点に立つ將軍が自ら勤皇の実をあげることが、徳川家が私心を去り、公の心を持ったということの証になります。將軍にとっても、お辛いこととは存じますが、この一事によって天下の人心が鎮まり、大乱を未然に防ぐことができます。幕府と朝廷が互いに争い、諸大名がこれに加われば、国内は内乱状態になる。西洋列強は当然、それぞれの後押しをして、介入してくる。そうなれば他のアジア諸国のように植民地化されることは目に見えている。「大乱」とはこうした事態を指します』。

慶喜が真っ先に「横井先生のご意見に感服した」と賛成すると、他の首脳達は反対する気持ちを失った。小楠の意見に感服した慶喜は幕府に登用

せんとしたが小楠は断っている。この江戸滞在中に、大久保忠寛や勝海舟と知り合いになった。

(3) 横井小楠と勝海舟

小楠と海舟の出会いは、小楠にとっては米国をはじめ海外の事情を海舟から教えてもらう絶好の機会となり、海舟には天下で恐ろしく思想の高調子の人物との衝撃的な出会いとなった。「おれは、今までに天下で恐ろしいものを二人見た。それは横井小楠と西郷南州とだ。横井は自分で仕事をする人ではないけれど、もし横井の言を用いる人が世にあったら、それこそ由々しい大事だと思ったのさ。横井の思想を、西郷の手で行われたらもはやそれまでだと心配していた、果たして西郷は出て来たワイ」海舟は小楠を、日本最高の学識者として尊敬し「自分は小楠の弟子である」とまで自称し、海舟が政治的判断などに困った時は、必ず小楠に相談するようになったのである。海舟が蘭・英・米・仏四ヶ国の長州藩下関砲撃回避交渉で苦慮していた時、龍馬を使者とした相談に対し「海軍問答書」を送っている。

小楠の海軍建設論は、「海軍を興すには、幕府一手ではとてもやれることではなく、諸侯と合体でやるべきである。交易の方法についても、諸侯と組合い外国へ渡航すれば、公平に交易の道が開けるであろうが、幕府に私があってはできない。金銀銅鉄などの幕府による独占を廃止し、諸侯にも自由に採掘させれば、海軍の備えも十分になる」というもので、海舟と龍馬の海軍建設路線そのものである。

(4) 横井小楠と坂本龍馬

春嶽の紹介で龍馬が江戸で初めて会った時の小楠に対する先入観は、「暴論をなし政治に妨害がある人物。廢帝論者」だったが、実際は尊皇の志厚く、小楠の忠実さを知った。小楠の公共の政、富国強兵、世界平和論の持論に賛同し、初対面から意気投合した間柄になった。両者の共通の尊王思想、海軍認識、文学的素養、脱身分感覚を持っていたからであろう。

小楠には、漢詩集「小楠堂詩草」があり、百

三十首中、5年間の福井時代に五六首詠まれた。

坂本家は代々、国学、神道、和歌を学ぶ伝統、家風があり、その感化を受けた龍馬の精神、行動の根本にあったのは、強い皇国意識、神国思想である。特に、土佐一の歌人・井上好春の娘・久が龍馬の祖母で、江戸へ剣術修行にでる18歳まで、和歌の素養をたっぷり身につけさせた。

土道忘却事件で沼山津に蟄居中の師匠・小楠を龍馬は3回訪れている。1度目は、海舟の使者として海軍の創設を相談し、2度目は、龍馬がその小楠の甥と門弟を引き取りに来て、またまた密談に及んだ。この時も小楠口癖の「日本をおおいに洗濯しなくてはいかん」という言葉を聞いた。龍馬は家族にあてた手紙のなかで、「天下の人物といふは、肥後に横井平四郎」と綴った。のちに龍馬が小楠の言葉を流用して、姉乙女宛に「日本を今一度洗濯いたし申し候」とのべたことは有名だ。3度目は、薩長連合奔走中にぶらりと訪れた。その時の会談の様子が徳富蘆花が『青山白雲』にスケッチしている。天下の人士の人品と器量を二人であれこれ評定したのち、小楠の「おれはどうだ」に、龍馬は莞爾と笑ってゆるゆると「先生あ、まあ二階に御座って、綺麗な女共にあつてもさして、酒をあがって西郷や大久保共がする芝居を見物なさるがようござる。大久保共が行き詰まったりしますれば、そりゃあちよいと、指図をしてやって、下さるとようございましょう」と言ったという。すでに60歳近い小楠に決起の行動を期待したのではなく、革命はわれわれがやるから頭上から見てほしいと言ったのである。

(5) 横井小楠と細川護久

明治3年の細川護久の藩政大改革での要部の人々は、皆小楠の友人及び門下生で、革新・医学校・病院などみな小楠の抱負の実現であった。実学党の人々は、小楠の遺志をついで、工業を初め農業、教育、医学など幅広い分野で開発と振興に努め、各分野の発展の礎を築いた。

2. 関連エピソード

(1) 脱藩浪人・龍馬の力の源

ライシャワー博士の指導を受けた歴史学者・マリアス・ジャンセン博士は、司馬遼太郎の「竜馬が行く」の新聞連載と同時期に「坂本龍馬と明治維新」を出版した。彼が龍馬の人的魅力を語っている。「龍馬が我々に与える印象は、こだわりがなく、快活で、楽天的、日本語でいう“明るい”のです。もう一つ印象的なのは、その心のしなやかさ、つまり融通性です」。

脱藩の身で、背後に藩の威光も持たず、歴史に残る活躍ができたのは、その非秀才の柔軟性の人的魅力を愛した者によって与えられた場が、世を動かす龍馬の背景にあったからと考えられる。まず、軍艦奉行・勝海舟の海国論に共鳴しての弟子入りで、人を束ねる才能を認められて海軍操練所の塾頭を任せられ、その後の海援隊・亀山社中のリーダーとしての活躍は西国五雄藩の力を背景としたものである。更に、グラバーは、軍艦奉行勝海舟と彼に従っていた土佐の脱藩浪人・坂本龍馬と密会した。“日本は変わらなければならない”と説くグラバーに既に咸臨丸で渡米したことのある勝が同調し、龍馬はたちまちグラバーに傾倒した。表立った活動のできないグラバーは彼らを利用して武器を輸入することに思い至り、矢張り立場上支障のある勝ではなく、龍馬を代理人にすることになった。かくして両者は緊密な関係になった。その後の龍馬の活躍は目を見張るばかりで、複雑怪奇で迅速、スケールが大きく歴史上最も魅力的な人物とさえ評されるようになった。グラバーとの関係については、両者に固い約束があったのか、おしゃべり龍馬も一切語っていない。

薩長同盟は西郷のドタキャンもあり、成立までには難航したが、最後は龍馬の斡旋で合意。薩摩藩の西郷隆盛、小松帯刀、長州藩の桂小五郎は立派な藩士だが、間に立つ坂本龍馬は一介の下級武士に過ぎない。最後の保証として両藩が認めたのは龍馬のバックに立つグラバーの存在であり、更にパークスに代表される英国が両藩を容認したことを彼らが知っていたからである。かくして1866年2月薩長同盟は、桂

要求の龍馬の朱の裏書き「表記された六条は小松帯刀、西郷隆盛の二人に私龍馬も協議した結果であって、まったくこのとおりに違いありません。将来といえども決して変わらぬことを神明に誓います」を付けて成立。

(2) 横井小楠のワシントン崇敬

「米国の開祖ワシントンなる者は常に世界の戦争を止むるを以て志と為す。ワシントンは堯舜以来の聖人或は優る所あるも知るべからず」と書いているのは次の決別の辞を読んでいたのであろう。

◆ワシントン大統領の「決別の辞」

「…(略)…国家政策を実施するに当たって最も大切なことは、ある特定の国々に対して永久的な根深い反感を抱き、他の国々に対しては熱烈な愛情を感じることがあってはならないということである。そしてそのかわりに、全ての国に対して公正かつ友好的な感情を持つことが、何よりも重要である。

他国に対して、常習的に好悪の感情を抱く国は、多少なりとも、すでにその相手国の奴隷となっているのである。これは、その国が他国に対して抱く好悪の感情のとりことなることであって、この好悪の感情は、好悪二つのうち、そのいずれもが自国の義務と利益を見失わせるに十分であり、…(略)…国家間の平和は、この好悪の感情の犠牲となって失われることがしばしばある。好悪を抱く国に対して同情を持つことによって、実際には、自国とその相手国との間には、なんらの共通利益が存在しないのに、あたかも存在するかのように考えがちとなる。一方、他の国に対しては憎悪の感情を深め、そこには十分な動機も正当性もないのに、自国をかりたてて、常日頃から敵意を抱いている国との闘争に誘い込むことになる。・(略)・」

第2次世界大戦遂行の中枢に居たウエデマイヤー将軍は、ルーズベルトがこれに反した愚行を犯したと非難している。現在もアメリカはその愚行を続けているように見受けられる。

(3) 南北戦争(1861-65)と薩摩藩

この南北戦争は世界経済を激変させたのだが、その余波が薩摩藩にも及んで、明治維新を進める原動力にもなった。一つは、この戦争により南部の綿花畑が荒廃し、世界中が綿花不足に陥ったことである。中国やインドの綿花がイギリスやフランスに輸出されたが、それでも足りない。これに目をつけた薩摩藩の御用商人・浜崎太平次は、日本国内で大量の綿花を買い入れ、長崎のグラバーを通じて、高い値段で輸出した。もう一つは南北戦争により飛躍的に改良された小銃が、戦後、大量に世界市場に出回ったことである。薩摩藩は綿花輸出で儲けた資金で、これらの小銃を大量に買い付けた。さらに長州藩のために、薩摩藩名義で武器を購入し、斡旋した。これが薩長同盟のきっかけとなった。

(4) 小楠と龍馬の尊王思想

小楠：「我が国に世界無比の幸福がある。皇統の一系がこれである。加えておくれて開く、これまた幸いである。他日大いに成る事がある。ただ君徳を輔翼し奉り条理のある所に任ずれば、開明無比の域に達せんことは、あえて疑いを容れない」

龍馬：「この数ならぬ我々なりと、何とぞして今上様(孝明天皇)の御心を安めたてまつらんとのこと、朝廷というものは国(土佐藩)よりも父母よりも大事にせんらんとというは決りものなり」。この深厚な尊皇の至情の中に龍馬の真の姿がある。

孝明天皇の次の歌との響き合いから、伝統ある「大御宝」「八紘一字」の美しい国柄を見ることが出来る。

「朝夕に民安かれと思ふ身の

心にかかる異国の船」

「澄ましえぬ水にわが身は沈むとも

にごしはせじなよろづ国民」

(5) 明治天皇と横井小楠

◆明治天皇に目見える

克明に書き残しており、「非常のご天資でまことに国家の大事」と天皇としての将来に期待を寄せている。明治天皇への遺言である遺表の

人道・治乱・君徳・交際の四ヶ条の内容を若い明治天皇に期待を込めて語った。「西洋各国のように利害追求に走り、ただ富国強兵を目的とする霸道政治でなく、人の良心に基づく王道政治を行い、外交も利害に左右されない自然の条理で対処するよう。また、宮中改革を行い開かれた宮中となつて、親しく大衆と接するほか、全国を巡幸することが必要」と要望している。明治天皇は、刻苦勉励され、横井小楠が理想とした堯舜の道を歩まれたように思われる。

◆海軍国家へ～明治天皇の意志(英国新聞記事)

明治天皇は、海軍拡張の予算が足りない時に、自ら宮廷費を削って毎年30万円を6年間下賜された事実を紹介して、その海軍拡張の結果は、日本の海軍をして永く東海を制御するの地位に達せしめたり。近代的艦船は開国的手段であると共に、それはまた東アジアにひたひたと迫る欧米列強から、独立を守るという「死活の問題」への手段でもあった。明治天皇は自ら宮廷費を節減してこの事を国民に知らしめたのである。

吾人は我が国(英国)においてかかる同一の類例を想像し得るや如何。そもそも英国における海軍の必要は日本より大なるにあらずや。海軍は我らに対しては死活の問題なり。

小楠が海軍力のモデルとしたイギリスが、明治天皇の治世後は、日本に見習えといっているのは隔世の感がし、先人の努力に敬意を表する。

(6) 仙台藩の林子平(1738-1793)

3度も長崎に遊学し、旧知のオランダ商館長に「日本を狙ってロシアが南下中」と告げられる。国情憂い決死の海防論「海国兵談」「三国通覧図説」を書いたが策は生かされず、奇怪な説を著したと蟄居を命じられた。海防に目覚めた幕府が罪を許したのは死後48年後であった。幕末、英米両国が小笠原諸島の領有権を主張したが、「三国通覧図説」の絵図が有力証拠となり、両国は引き下がったことで名を残した。

豊かな米経済に安住し、江戸初期の支倉常長使節の進取の気風を失い、奥羽越列藩同盟の戦

いでは、圧倒的な大小火器の差で完敗した。しかし、藩校・養賢堂の群像は多彩で、西の頼山陽一族と並ぶ大槻一族。蘭学の玄沢、漢学の磐溪、教育者文彦を世に出した。実学尊重の気風は近代になって、東北大に継承される。

(7) 川勝平太教授と横井小楠

小楠の「経世済民」の考え方は、川勝教授の「富国有徳論」に蘇り、それをういた故小淵首相の所信表明以来、日本の今後の世界の中でのあり方の指針となっている。また、「日本文明と近代西洋」は、日本人による欧米と異質の日本独自の近代歴史観を提示し、欧米の「産業革命」に対し、日本は「勤勉革命」で同時期に近代化したとする。さらに、「海洋連邦論」で海洋アジア諸国を繋ぐ西太平洋津々浦々連合を海洋国家・日本の将来の有り様と提示している。

加えるに、富坂聰著キャッチフレーズ「平成の林子平による警世の書」とある「平成海防論～国難は海からやってくる」が参考になる。

(8) 日本属国化を狙う中国へ、小楠なら

2007.5 中国は、アメリカに「ハワイを基点として米中が太平洋の東西を『分割管理』する構想を提案し、着々とその構想を進めている。

小楠は、ロシア・プチャーチンへの対応につき、外国奉行・川路聖謨に「夷慮応接大意」(1853)で述べた。「我が国の外国に対する国是は、有道の国は通信を許し、無道の国は拒絶するの二つであり、応接の人材を選び天地有正の仁心を宗とする国は受け入れ、不信不義の国は天地神明とともにこれを威罰するといった大義を海外万国に示さねばならない。米国と協議し、率先して世界平和に貢献しなければならない」。

幕末に西洋列強が押し寄せる中で見事に国家の独立を貫いた明治日本に比べれば、平成日本ははるかに恵まれた立場にあると言える。足りないのは、国際社会の中で独り立ちしてやっていこうという国民の意志と、地政学的な戦略眼だろう。だから今こそ、小楠の国際協調主義、世界平和主義を学び直す必要がある。以上